

研究課題	児童の学校生活満足度を高め、適切な自己認識・人間関係を構築する心を育てる教育プログラム
副題	～児童の状態・感情変化を見える化、感情データの学級経営・学校経営への活用～
キーワード	自己認識・他者認識
学校/団体名	徳島県上板町立高志小学校
所在地	〒771-1347 徳島県板野郡上板町高瀬 1108
ホームページ	http://e-school.e-tokushima.or.jp/kamiita/es/takashi/html/htdocs/

1. 研究の背景

本校は徳島県上板町の南側に位置し、学校の南側を吉野川が流れ、豊かな自然に恵まれたのどかな農村地帯である。今年度の児童数は137名、9学級である。穏やかで控えめな子どもが多く表面的に大きなトラブルは少ない。しかし、コミュニケーション、表現することが苦手で、他者と適切な人間関係をつくることができにくい子どもが各学級に複数名いる。自己表現が苦手な子どもを多様な手段を用いてより深く理解し、児童の自己実現を支援することが重要であると考え。そこで、ICTを活用した感情ケアソリューションを児童理解のツールとして使用することにした。

2. 研究の目的

本校が使用している FEELBOT というツール、世界初のスマート感情ケアソリューションシステムを使うことで児童の気持ちの状態・変化を見える化する。これらの感情ケアソリューションシステムを活用することで、児童の毎日の学校生活での気持ちの状態・気持ちの変化、交友関係を見える化し、教職員で情報共有する。そして、これらのデータを基に、児童への声かけ、勇気づけ、学級経営の改善、教育相談の充実、家庭との連携を行うようにする。

学校現場は日々様々な課題に直面し多忙な毎日を送っている。見落としてしまう恐れのある、児童の気持ちの変化に気づきを与えてくれるのが本ツールである。

FEELBOT は児童が登校直後、帰りの会終了後にタブレットの FEELBOT にログインし、その時に「幸せ点数」・「その時の心の顔の表情」・「心の色」の3つのデータを入力する。下校時は、その3つのデータに加え、一日の感謝やありがとうを表すハートマークを最大3人まで送信することができる。私たち教職員はこれらのデータをリアルタイムで共有することができる。（児童は自分が入力したデータを見ることはできない。）担任だけではなく、管理職を含めた複数の教職員と情報を共有することで、学校全体で児童理解を深めサポートする体制を整えることができる。同時に児童は日々の生活を振り返り「自己認識」・「学級内での交友関係」の振り返りを日常的に行うことができ、望ましい自己理解・他者理解を促進することができる考えた。

3. 研究の経過

高志小学校の生徒指導上の課題を検証した。

(1)子どもが抱える問題

- ・自分と向き合う機会が少なく、自尊感情が低く自信がない子どもが多い。
- ・自己決定する力が弱く、自己表現する力の弱い児童が多い。
- ・子どもたち同士のコミュニケーションが乏しく、集団に不適應の子どもの比率が高い。

(2)教師が抱える問題

- ・経験の長短に関わらず、子どもたちを見取ることが十分ではない。
- ・課題のある児童、支援が必要な児童へのケアが十分ではない。
- ・子どもたちとのコミュニケーション（声掛け）が十分ではない。

(3)FEELBOT に期待される効果

・リアルタイムで学級全員の心の状態を把握することができ、児童理解のための手がかりとなる情報を得ることができる

・「声掛け」が必要な子どもをピックアップし、子どもたちとのコミュニケーション機会を増やすことができる。その結果、悩みを持っている児童を、問題発生の前に発見できる可能性が高まる。

・個々の児童が日々の生活を振り返ることを通して、望ましい自己認識、他者理解を促進することができる。

これらの結果、毎日の児童の感情をケアすることができやすくなり、全ての児童のよりよい発達を支援し、ひきこもりやいじめ、不適應の防止につながるのではないかと考えた。

(4)FEELBOT（本ソフトウェア）導入までの経緯

FEELBOT は NEC と D2emotion（韓国ベンチャー企業）が共同開発した感情ケアソリューションであり、韓国内の小学校ではすでに導入実績がある。平成 29 年度、両社が日本国内で実証実験を展開することになり、本校が実証実験校の一枚になることから使用が始まった。導入に際しては、システム上の課題、セキュリティ上の課題、データを誰が、いつ、どのように活用し学校現場に生かしていくかが大きな課題になった。そこで、高志小学校が中心になり、2 社と上板町教育委員会、鳴門教育大学が共同で研究体制を構築し実証実験、実証研究が（平成 30 年 4 月から）スタートした。

(5)導入に際して

①システム上の課題のクリア

FEELBOT 導入に際して、町内のセキュリティを重視したシステムとの中にセキュリティポリシーの内容をどのように調整するかが最初の課題になった。そこで、町教育委員会 ICT 担当者と 2 社の社員が協議を重ね上板町のシステムに合致した状況で使用できる環境を整えた。

②教職員研修の実施

働き方改革の重要性が指摘され、学校内の業務の見直しが迫らる中、新たなツールを導入する

事への教職員の物理的・精神的負担の壁をどのようにクリアするかを検討した。その中で、朝と夕方のタブレットの起動は事務職員と専科教員が行うことにより担任が関わらなくていい体制にした。そして、学級担任および教職員は毎日の各学級のソシオグラム、児童の幸せ点数、ハートの発信状況のみを確認することだけから始めるということで共通理解を図りスタートした。しかし、実証研究は平成 31 年 3 月で終了することになり、平成 31 年 4 月以後の継続方法を検討していた。そのような状態で困窮していた際に本助成をいただくことができ、予算的支援を受け高志小学校で FEELBOT の使用を継続することができるようになった。

4. 代表的な実践

(1) 児童への指導

FEELBOT で扱うデータについては、個人の感情（自己認識）、交友関係という個人情報であるので、個人情報の保護をどう担保するのが課題となった。そこで、児童一人一人に ID とパスワードを付与し、個人の ID とパスワードは他者に教えないとすることを徹底した。さらに、保護者に対しても、本実証実験、実証研究での個人情報の取扱規程について同意を得た。その上で、本校情報担当教諭から、FEELBOT 使用の意義と使用方法について順序よく、具体的に指導した。

(2) 日常的な活用について

① 児童への「自己認識について」の指導

FEELBOT 活用に際しての目標に「児童の望ましい自己認識を高める」ということがある。そこで、5 年生・6 年生では、学級活動の時間、道徳の時間を活用して、「幸せってなに」、「なりたい自分・望ましい自分て何」という主題で話し合い活動を行った。今まで「幸せ」や「なりたい自分」ということについて深く考えていなかった子ども達がこれらのテーマについて意識して考えるようになった。そして、これらの指導と FEELBOT の使用を通して日々の自分を振り返るといった活動を繰り返すことにより、今の自分となりたい自分について考えるようになってきている。

② 教職員のデータ活用について

教職員は子どもの入力した感情データをいかに学級経営、生徒指導、児童理解に活用し日々の子どもへのケアを図ることができるかが重要になる。そこで、以下の手順をルーティーン化することにした。事務職員・専科教員が午前 9 時頃に 4 学級の児童の入力状況の確認と「幸せ点数」・「心の表情」・「心の色」を確認し、状態のよくない児童の氏名とデータをピックアップし、業間の休み時間までに職員室の他の児童に見えない場所に一覧を掲示する。そして、学級担任や他の教職員はそれらの児童を確認し、授業時間、休み時間の見守りを行う。必要と判断すれば、学級担任や養護教諭、専科教諭、用務員、事務職員、管理職は声かけや個別に短時間の面談をするということを行うことにしている。数日間のスパンでは、他の友達から「ありがとう」・「楽しかったよ」のメッセージであるハートマークが送られていない児童については特に注視し、学級での集団活動を一層導入したり、放課後等の担任による懇談を実施している。また、日々の児童の感情データを基に、職員室では児童に関わる教職員が「気になる子ども」の学校生活の様子や家庭生活の様子について積極的に情報交換を行っている。

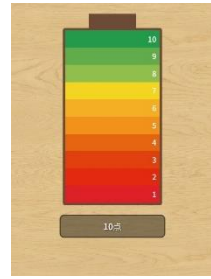
[登校後・帰りの会終了後の児童の入力画面]



心の表情



心の色



幸せ点数

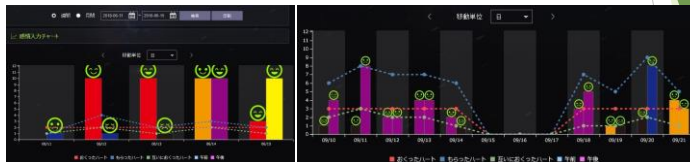
[教 職 員 の デ ー タ 分 析 画 面 (一 例)]

[学校紹介](#)
[FEELBOTとは](#)
[FEELBOT活用の動機](#)
[FEELBOTの具体的な活用](#)
[日々の活用](#)
[データの紹介](#)
[データの分析と教職員の対応](#)
[成果と課題](#)

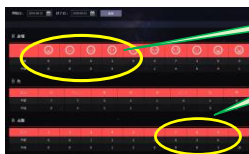
1日の流れ



児童下校後、管理職、養護教諭、専科教諭、校務員、学級担任が各児童データを確認



放課後「気になる児童」について対応・情報の共有



表情の暗い子がゼロ

幸せ点数のが高くなっている

▶ 校長、教頭からの担任、他の教職員への謝意および対応の指示

③ データを活用した教職員の具体的対応

・6年生学級担任

全体的に幸せ点数が高くないので、幸せについての授業を行った。多くの子が、そのときに「楽しかった」「おもしろかった」ということが幸せにつながっていると答えていたので、自分の生活を見つめて、よりよく生きていくことが幸せだと考えられるよう朝の会等でも考える時間をとるようにしている。急激な変化があった児童や幸せ点数に波がある児童については、1対1で話をして気持ちの変化を聞いている。自分の気持ちを話してくれるので、その後の生活の中での、声のかけ方や指導の仕方でのポイントが絞られてくる。保護者にも連絡し、つながりをもつことができた。

・5年生学級担任

あるグループは、幸せ点数が高いことが多くても、お互いに贈り合っているハートが途絶えたり、一方的になったりすることが続くとはよくないサインである。このグループの人間関係がクラス全体に影響を与えるので、定期的にチェックし、放課後等に子供と話し合いをしている。

・養護教諭

保健学習の授業に入る前に、データを把握した。グループワークの場面で介入や声かけが必要

なグループが事前に把握できた。友達や相談できる人がいるかなども事前に把握して学習に結びつけられる。保健室登校の児童にも、入力してもらった。幸せ点数や表情がよくなり、保護者にも伝えると、安心してもらった。クラスに戻れるように、どのタイミングで、どのような手立てが必要なのか、先生方や保護者とも連携している。

・用務員

それぞれの学級の先生方と気軽に話し合っている。また、職員の中でも「今日は何点？」と声をかけ合っている。自分と違う感じ方や思いを知ることができ、声のかけ方や児童理解が深められた。

5 研究の成果

(1)児童にとっての成果

①日々の振り返りを通しての自己認識力の高揚

学習指導の中では、毎時間の授業目標に対して自己の学びを振り返ることが日常になってきている。しかし、メンタル（感情）の部分で日々の自己の状態を振り返るという活動は社会全体の中では広がっているとは言えない状況である。その中で本実践に取り組むことにより自己の日々の感情を振り返り、明日は「こんな自分でいたい」という自分の中でのあり方を考える児童が確実に増えてきている。(6年生児童アンケート結果より)そして、自分にとっての幸せとは人との関係性の中で生まれることを自覚し始めている。これらの自己認識を今後、自尊感情の高揚につなげていきたい。

②積極的に集団活動に参加しようとする態度の育成

下校時の子どもの様子を見たり、FEELBOT で友達にハートを送ることについて子どもと会話をすると、毎日の友達との集団活動の大切さを認識してタブレットに向かいあっている。明日はもっと友達と話そう、もっと遊ぼうということを考えている。日々のこのような小さな目標が人間関係を深め、広げることができてきている。

(2)教職員にとって

①児童の多面的な理解

日々の学校生活で子どもと話し、共に活動し、保護者とのコミュニケーションを通して児童を理解をすることは何よりも重要である。しかし、FEELBOT データを活用し今まで見落としていた、見えなかった子どもの側面を少し見ることができる。それもリアルタイムに、毎日変わる感情だからこそ、可視化されることにより私たちに考えるきっかけを与えることができていく。私たちの目と心、デジタルツールを活用し児童の多面的な理解を深めることができる。

②学級経営の改善と評価ツール

Q-Uアンケートが学級の状態を把握できるように、FEELBOT データの感情分析ノートの活用を図れば、学級内での幸福度と学級の凝集性を数値的データとして評価することができる。長期的なスパンでデータ蓄積がなされるほどデータの信憑性が高くなっていく。学級担任や各学級に指導に入る教職員は学級の成熟度を判断して、次の具体的な教育活動を設定することができる。

③教職員のコミュニケーションの活性化

一つのデータを見て、放課後、お茶を飲みながら「気になる子ども・気になるデータ」について教職員が意見交換をしている姿を見ていると、これがみんなで関わる生徒指導であるということを感じる。職員室が一人の子どもの話題でコミュニケーションが活性化し、無機質なデータに心（情緒）が入る瞬間であり素敵な時間になっている。

④学校運営の改善と評価ツール

校長にとって児童一人一人を深く理解することは物理的にも精神的にも非常に難しい事である。また、学級の凝集性の高さを評価し、学級担任の悩みに耳を傾けることも簡単な事ではない。しかし、FEELBOT データはその契機を私に与えてくれる貴重なデータである。このデータが発端になり、私が気になる子どもに声をかけたり、学級担任とのコミュニケーションを始めることができる。最終的には私の学校経営が健全に行われているかどうかを判断させてくれるツールにもなっている。

6. 今後の課題・展望

子どもは FEELBOT にふれることは日常であり、完全に学校生活の一部になっている。しかし、全教職員がデータを有効に活用できているかどうかという点ではまだまだ課題がある。デジタルデータに限らず情報収集、整理分析、活用するのは人である。人・教職員を育てるための工夫を今後も各種研修を通して探究しなければならない。

7. おわりに

日本社会は SOCIETY5.0 をめざし、日々の生活の中に AI、IOT が急速に普及する今日、学校においては徳島県教育委員会の校務支援システムの導入、各学校においても校務のデジタル化が進んでいる。児童の家庭生活においてもスマートフォン、タブレットの使用は日常的になり、これらの機器を生活の中で活用できない人は、日々の生活の中で有益な情報を収集、活用できずに自分の生活の中に不便をきたす可能性も大きくある。私たち教職員にとっては児童・生徒に関するデータをデジタルで一括管理し活用できる環境を構築することが今後の学校にとって学習指導・生徒指導のみならず、働き方改革の視点からも非常に重要であると考えます。デジタル社会のリスクを十分に認識したうえで校務のデジタル化を推進したい。

8. 参考文献

- ・教育再生のシナリオの理論と実践（2015年 現代出版 鳴門教育大学 久我直人著）
- ・高志小学校 FEELBOT 実証研究に向けてガイドライン（NEC ネットエスアイ株式会社 2018年作成）
- ・FEELBOT 実証研究に関する覚書（2018年1月 D2EMOTION）